

# 家族内観の有効性に関する調査

## ～ 第 1 報、予備調査の結果～

医療法人耕仁会札幌太田病院 内観療法課

奥村弓恵、遠田真弓、佐藤昌史、篠田崇次、根本忠典、太田健介、太田耕平

### 1. はじめに

当院では、病棟内・内観療法修了後、若い症例には原則的に家族内観を実施している。内観療法での気付きの相互確認、家族関係の回復、絆の強化に活かし、再発予防、健全な家族関係の成長を目指している。当院では、平成 19 年度の内観療法修了者 543 例中、152 例（28%）に家族内観を実施し、実施経過を〔家族内観記録〕に記している。現在、予後調査を実行中であるが、患者属性など予備調査結果を報告する。

### 2. 当院の家族内観の方法

患者の内観療法開始時、家族にも記録内観を依頼し、家族全体の協力を得ることに努めている。家族内観は、患者の内観修了時に実施し、家族相互の感謝と反省、今後の相互扶助、連帯と独立などを語り合う。そして、手、足、背中などのスキンシップを行ない、実感、共感を確かめ合う。その後、患者、家族に気付きをレポートで提出してもらう。これらのシステム化が治療効果を高めている。

### 3. 調査方法

対象は、平成 19 年度に当院で家族内観を実施した 152 例中 99 例（平成 19 年 10 月～平成 20 年 3 月までの全家族内観修了者対象）。患者属性（性別、年齢、疾患、家族構成、結婚歴）、内観方法・場所、家族の記録内観実施の有無、参加者、実施時間、スキンシップ実施の有無、情動体験の有無などにつき「家族内観記録」の調査を行った。今回は、家族療法の必要性の高い 10 歳代の症例（30 例）において、施行後の感想レポートの内容を分類し、質的な検討を行なった。

### 4. 結果

家族内観を受けた患者の性別は、男性 48%、女性 52%。年齢は 10 歳代 30%、20 歳代 17%、30 歳代 27%、40 歳代 7%、50 歳代 10%、60 歳代 8%、70 歳代 1%。疾患（ICD-10）は、F1 依存症 26%、F2 統合失調症 8%、F3 気分障害 27%、F4 神経症性障害（身体化障害など）9%、F5 摂食障害 5%、F6 人格および行動障害 11%、F9 小児・青年期の行動障害 13%。

家族構成は両親健在 62%、父母の離婚あり 13%、父死亡 13%、母死亡 1%、両親死亡 11%。父母の離婚については、10 歳代では 45%であった。

患者本人の結婚歴は、未婚 65%、既婚 28%、離婚 7%。内観方法は集中 72%、ゆったり 9%、ゆったりから集中移行 9%、三日内観 9%、集中からゆったり移行 1%。内観

場所は、内観室 68%、自室 14%、保護室 8%。家族へ事前の記録内観の依頼はあり 99%、不明 1%。家族内観参加者は父母のみ 34%、母のみ 21%、父のみ 3%、兄弟 13%、配偶者 19%、子 7%、祖父母 1%、義父母 2%。実施時間（3つのコースから患者、家族が選択）は 60 分以上 43%、30~60 分 9%、30 分 48%。家族内観時のスキップの実施 93%、実施せず 7%。情動体験は、本人家族共にあり 42%、本人のみ 11%、家族のみ 25%、共になし 22%であった。

10 歳代の症例における終了後の感想を分類した結果について、主なものを挙げる。まず本人は「家族の気持ちが変わった」など相手理解に関する内容が多く（63%）、次いで「言いたいことを言うことができた」など自己表出に関する内容もあった（43%）。親の感想では「親がどうあるべきかに気づいた」など親子関係の直面化に関する内容が最も多く（70%）、「きちんと話し合っていなかった」など対話不足を認識した内容もまた多く見られた（63%）。また、本人、家族共に「考えを聞くことができた」という相手理解に関する気づきが多く（47%）、全体的に相互信頼、理解につながる内容が多かった。

## 5. 考察

患者が内観療法で得た気づきを家族と共有することにより、家族間の相互理解、信頼関係の回復、健全化に役立つと考えられる。その際、家族も記録内観終了後実施すれば、より患者を受け入れ易くなり、効果が高まると考えている。

10 歳代の症例では、両親が離婚している割合が高いことから、家族療法の重要性がうかがえる。今回の検討からは、家族内観が家族関係の改善に有効であることが推定できる。現在、この仮説を検証すべく予後調査を開始している。1 年予後の調査から、家族内観の有効性や患者属性、実施方法と有効性の関連について報告する予定である。今回はその前段階として、患者属性など予備調査の結果を報告する。